

# 高校生の部

高校生の部 テーマ

## 2025年の日本を担う わたしの夢

世界の国々は、今、解決しなければならないさまざまな課題を抱えています。日本も、少子高齢化、財政赤字、国際競争力の低下など多くの課題に直面しています。そこに、東日本大震災からの復旧・復興という課題が加わりました。一人ひとりが少しずつ協力し合い、負担を分かち合いながら解決に向けて取り組む必要があります。

皆さんには約14年後、2025年の日本において、30代になった自分を想像しつつ、社会の一員として自分がどうありたいかという“夢”を考えてほしいと思います。また、その夢の実現に向けて、日本や世界がどのように変わっていくのかについても、考えておく必要があります。

以上を念頭に置いて、「2025年の日本は、こういう社会になっていると思うので、それに向けて自分はこんな目標をもち、努力していきたい」という“夢”を考え、日本や世界の発展につながる提案をまとめてください。

日本を  
元気に  
する

## 大賞 [高校生の部]

東日本大震災による放射能汚染への危機感と自分の専門分野である生物学を結びつけ、ユニークで具体的な提案をしたところが高く評価されました。

NRI学生小説コンテスト2011  
2025年の日本を担う  
わたしの夢  
入賞作品



## ふたたび大地に立つ

——そのために私がやれること

宮城県仙台第三高等学校2年

伊藤 愛里咲 いとう ありさ

### 1 はじめに

東日本大震災以降、私たちがこれまで描いていた未来予測が単なる希望的予想であることを痛感した。ライフラインの途絶した生活は先進国であるはずの日本が、いかに自然の猛威に弱いものか、電灯の消えた中、ろうそくの炎を見つめながら考えさせられた。

日本の未来はどのようになるのだろうか。GNPで中国に抜かれ、技術立国の担い手となる私たち学生の学力も低下し続けている。そこに今回の震災での経済成長率の低下である。日本は坂を下り続けてゆくのか、これまでは普通に大学に入り、普通にしてい

ば、私は、そして日本は、安泰だと思っていた。しかし被災県宮城にあって、私たちの未来は皆が手を取り、一人一人が自分の役割を確実に果たしていかなければ到底復興し得ないものだと思い始めた。

### 2 日本の現状

経済大国日本、表面上確かにそうだったのであろう。しかし「想定外の地震」によりその体制そのものの脆弱さが露呈し、震災後の復旧もままならない状況である。この状況を終戦後に似ているとして震災後と呼ぶ人が

いる。しかし私は終戦後と同じだとは思うことができない。それは、終戦時は国土全体が焦土となり、全国民がその被害を受けている。しかし、今回の大震災は被害こそ甚大だが、東日本の沿岸部の被害が主であり、日本全国民から見ればその痛みは、限定的なのではないのかと思う。震災発生時の関東圏での食料の買い占めや、京都の大文字焼きでの陸前高田の薪不使用問題を見るにつけ、被災県以外では他人事ではないのかと思えてならない。

しかし米どころ東北、全国有数の果実生産県福島、岩手・宮城の全国屈指の漁獲量などは、いずれもここ数年では復興し得ない状況であり、震災は日本の経済をボディープローのように衰退させてゆくだろう。東海地震や南海地震が囁かれる中、このままでは終戦時以上の困難期が襲来するのではないか、と思えてならない。

極東にあって西側の防波堤としての役割を果たしてきた日本。しかし震災後は取り巻く国々も対応が変化してきた。北方四島でのロシアの支配強化、昨年以来の尖閣諸島問題での中国の横暴な対応、そしてアメリカ経済の低迷、日米の弱体化につけ込み、共産圏諸国の侵食はあまりにも露骨だ。もはやアメリカに追従するのみでは、ロシアや中国等の大国には対応できないであろう。また他のBRICs等との関係作りや、国に属さないアルカイダ等のテロ組織への対応についても日

本として新たな方策を打ち立てなければならない。

### 3 日本の未来と世界の未来

経済活動の基本は食料の生産であり、生産量を左右するのは気候である。その気候が温暖化していることは周知の事実である。国際的に対応策が取られているが、その進行を止められないのが現状であり、豪雨や竜巻、干ばつ等が報道されない日はない。つまり穀物をはじめとする食料を生産する環境は年々悪化しており、食料を原因とする国際的な紛争の火種は年々増大している。加えて日本では放射線による農耕地の喪失がある。海岸線は農耕地や田が多い。津波での塩害に加え、放射線による農耕地等の復旧の大幅な遅れは、食料自給率の低い日本の喉元を締め付ける問題だ。放射線値の低い地域では、除染が進むだろう。しかし放射線値の高い地域の野山（これまで人があまり入らなかった地域）は今後だれが整備するのか。永久に立ち入り禁止の場所が残るのではないか。

## 4 私の夢

私は動物が好きで将来は生物学の道に進みたいと思っている。そして私には小学生時代から特に気になる生き物がある。それがヒキガエルである。その研究で中学生の時、知事賞を受賞し、全国審査に出展したこともある。研究の結果、ヒキガエルは個体が増えると、他者の縄張りを侵そうとせず、新たな縄張りを求め生息地を拡大する性質があることが判っている。

彼らは繁殖期以外は、繁殖地である沼や池から数百メートルから数キロメートルも離れた場所に住み、気に入った場所で定住し、その場所からほぼ移動しない。食性は口に入る大きさのあらゆる昆虫であるが、共食いはしない。観察下では、ウジなら一日200匹以上食べる。他のカエルのように池等の大規模な水辺は必要とせず、乾燥地であっても長期間生息できる。時々腹部から水分を吸収すれば十分であり、観察下では、アスファルト道路で生息するヒキガエルが湿らせた雑巾に腹部を当て水分補給し、数日に1回同様の行動を取り、長期間生息していることを確認している。また糞は直径1センチメートル、長さ4、5センチメートルの物を排泄するが、ミミズ等が好んで食べることを観察している。オタマジャクシは最低20リットル程の水たまりで成体になる。成体はほとんど鳴かず、騒音の心配もない。なお観察下ではカ

エルの糞を土中に入れてトマトを育成すると、入れないものに比べ大きく育成する。

このことから私は、被災地(特に放射線の影響により、人による除染作業が進まない地区)にヒキガエルを大量に投入し、人が除染作業に着手する以前の土地表層の除染と植生の回復に役立てたいと考えている。これによりハエや蚊等の害虫の駆除が進み、糞はミミズ等の土中生物の餌となる。活動を終えたカエルの死体は、他の生き物とは比較できないほど早期に乾燥し、土に還元されることとなるが、多くの餌を食べたヒキガエルは放射線値が高いことから、土になる前に、死骸付近の土を採取する。このことで土表面の除染にも貢献できる。ヒキガエルの骨は大きく見つけやすいので死骸の発見も容易である。ヒキガエルは一旦定住すれば、そこからはほぼ動かず、他のヒキガエルはその場所を侵さない、つまり数が増えればそれだけ遠くに広がることになり、短期間で被災地全域に繁殖するだろう。私は、ヒキガエルが将来的には被災地に限らず荒廃した土地の改善に役立てられないかと考えている。

## 5 まとめ

私は生物学者になりたい。生物の研究を通じ、動植物が自然とどのような関わりをもち、どのように生きているのかを見極めたい。

## ふたたび大地に立つ

——そのために私がやれること

温暖化やその他の自然の変動に対応する糸口が、きっとそこにあるはずだ。普段何気なく見ている動植物が、人類の救世主になるかもしれない。動植物が示す微かな、そして重大なサインを見落とさないようしっかりと学んでゆきたい。そして今以上に豊かな地球を、次世代に胸を張って引き継げる大人になりたいと思う。

## 優秀賞 [高校生の部]

NRI学生小説コンテスト2011  
2025年の日本を担う  
わたしの夢  
入賞作品



「世界から貧困を吹き飛ばす」を夢に掲げ、カンボジアでの体験から問題解決策を提案。強いメッセージと若々しい意気込みが審査委員の心に響きました。



# 思考回路のイノベーションで 貧困を吹き飛ばせ

—援助から win-win ビジネスへ

島根県立隠岐島前高等学校1年

岩沢 壮太 いわさわ そうた

## 1. 私の夢

私の夢は「世界から貧困を吹き飛ばす」これに尽きる。

今世界には一日を1.25ドル未満で生活している人が約14億人、学校に行けない子どもが7,500万人以上いると言われている。だからといって私は同情は求めない。なぜなら、それでは世界は何も変わらないからだ。国のODAやNGO、NPOによる発展途上国への支援のほとんどは応急処置であり、それ以上の根本的な貧困スパイラルの変革を遂げることにはできない。「仕事がない→お金がない→子どもや家族が学校や病院へ行けない→子

どもが大人になっても字も読めないのに就職先などあるはずもない→仕事がない」という風な貧困スパイラルに巻き込まれている家族に、一日分の食事を与えて根本的な解決になるだろうか？ 私が先日カンボジアを訪れた際、道路の道端にサービスエリアを発見した。大きな建物に、床は大理石。おそらく莫大な費用をかけて造られたであろうこの建物の中にあるのはトイレと客のいないレストランのみ。車なんて私達の車を含め2台だけであった。そんな無駄だらけの建物が日本の援助で建てられたと聞いた時は愕然とした。と同時に援助では何も変わらないことを改めて確信した。



## 思考回路のイノベーションで貧困を吹き飛ばせ

——援助からwin-winビジネスへ

では、どうやって貧困をなくしていくのか？

私はビジネスでしか世界を変えることはできないだろうと考えている。それも、現在叫ばれている企業のCSRやソーシャルビジネスといった課題解決専用ではなく、利潤追求型つまり本来の企業の形で変えていけると考えている。

## 2. 大企業の発展途上国のとらえ方

——これまでとこれから

みなさんは何かのサービスや商品の値段を下げる時に何が一番効果的だと考えるだろうか？ この間に対して多くの大企業がとった対策は「人件費削減」だった。激しい価格競争の中で企業が求めたのは発展途上国の安い労働力だった。私がカンボジアのレンガ工場を訪れた際も多くの児童労働を目撃した。2,000個運んだら5ドルという出来高制だが実際は朝から晩まで働き続けても200個が限度。つまり一日0.5ドルで働いているということだ。後で責任者から話を聞くとこのレンガは先進国に輸出されるそうだ。

このように現代の企業からすると、発展途上国は低賃金で労働力を賄える絶好の場所としてのとらえ方しかない。たしかに企業側からすると安い労働力は非常に魅力的だが、それでは現地の人は住む家どころかその日の食

料すら賄うのが困難だ。

そんな中で、企業にとって安い労働力しかとりえがなかった発展途上国が、近年のBRICsと呼ばれる新興国の急速な発展によって、大きなビジネスチャンスの場合という風に変わりつつある。

そう言える理由は、日本のGDP伸び率と比較してもらえば一目瞭然だろう。日本のGDPは1999年から11年連続のマイナスである。さらに2010年では初の2%超えのマイナスを計上するなどいいことなした。それに比べほんの数十年前まで見向きもされなかった新興国の一つでもある中国の2010年GDP伸び率は10.3%と日本とは比べ物にならない。このような事を考えれば誰しも一つの結論にたどり着く。「日本で売っても売れないのでは？」。実際、日本企業が今次々と新興国に進出している。

BRICsは自ら自国の強みとなるものを持っていた。中国やインドは言うまでもなく莫大な労働力。ロシアとブラジルはそれぞれ貴重な資源を有している。しかし、資源や人などの強みが乏しい東南アジアやアフリカなどはなかなか発展できずにいる。このままいくと、15年後も現状を打破できないだろう。

私はどうすればこの現状を打破できるかと考えたが、その答えは一向にでないままだった。そのためこのままではいけないと感じ、つい先日ヒントを求めカンボジアの地に足を下ろした。そこで私が得たビジネスチャン

## 思考回路のイノベーションで貧困を吹き飛ばせ

——援助からwin-winビジネスへ

スから、貧困撲滅への大きな希望を感じた。その小さな光をみなさまにご紹介したい。

### 3. 発想転換から生まれる イノベーション ——援助からビジネスへ

カンボジアの乗り物名物といったら一番に出てくるのが「トゥクトゥク」だろう。バイクの後ろに籠?みたいな物が付いている乗り物だが、カンボジアではこのトゥクトゥクが日本というタクシー的役割を果たしている。観光客として行ったならば必ず一回は乗るであろうトゥクトゥクだが、これには大きな弱点がある。それはすべてが個人運営のため、人通りの多い道沿いや大きいホテルの前や観光名所は極端に台数が多いのに対し、それ以外の場所はまったくと言っていいほどいない。実際私が移動しようとした際も「トゥクトゥク乗りたいんだけども見当たらない」という場面が非常に多かった。さらに、さきほども述べたように個人運営であるため、ドライバーはその日いくら稼ぐかでその日食べられるご飯の量が決まってしまうので、客によって値段を上げたり、かなりしつこく勧誘する場面も少なくない。そのため警戒してトゥクトゥクには乗らないという観光客も増えつつある。つまり「信用」がないのだ。さらにはあまりにトゥクトゥクの数が多すぎて客がまったく取れない

日も珍しくはない。この三つの課題を見た時私はある解決策を思いついた。

私はまず、「株式会社:トゥクトゥク」を立ち上げ、現トゥクトゥクドライバーを正式に雇う。そして固定料金制を導入したり組織としてのサービスを徹底し、観光客から「信用」を獲得する。次に町中に「トゥクトゥク呼び出しボタン」を設置し、観光客が好きな場所で好きなタイミングで呼び出すことを可能とする。さらに、会社としての事務や経理などの労働力に、雇ったドライバーを充てることで「トゥクトゥクの過剰供給」という問題を解決でき、かつ新たな人件費を生み出す。さらにさらに、トゥクトゥクを会社として一まとめにすることによって広告ビジネスをも展開できる。これらを行うことによって、今までその日の食料で精一杯だったドライバーやその家族が、毎日安心して生活でき、子どもは元気に学校へ行け、学業やスキルを身につけることで貧困スパイラルを抜け出すことができる。のみならず得た利益でもっと多くの人を雇用したり新しいビジネスを展開できる。

私は、援助というどちらかが一方的に物やサービスを与えるのではなく、両者互いに汗水たらして働き、両者互いに利益を得る、このwin-winビジネスこそ世界から貧困をなくす最も効果的な策だと確信している。そして私は、このwin-winビジネスを、柔軟な心と優しい心を持ち合わせている日本人が率先して行い、世界をリードしていくべきだと考えている。



## 4. 私の夢

最初にも述べたように私の夢は「世界から貧困を吹き飛ばす」これに尽きる。だが、その夢を達成する過程でも大きな目標となるものを見つけた。それは、企業のCSRや国のODAで援助をするのではなく、両者互いに利益を追求するwin-winビジネスをこの日本全体として行い、世界をリードしていくことだ。さらに私が、その、世界をリードする日本をリードしていくことだ。今回私が紹介したビジネスプランは小さなものかもしれない。しかし私は、その先には必ず大きな結果が付いてくるのだと信じている。「世界の貧困がなくなるまで、私は絶対あきらめない」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%86%85%E7%B7%8F%E7%94%9F%E7%94%A3>

・「中国の2010年GDP伸び率は10.3%」

BRICs 辞典

<http://www.brics-jp.com/china/gdp.html>

### 引用元

- ・「一日の生活を1.25ドル未満で生活している人が約14億人以上」  
TheWorldBank <http://web.worldbank.org/WBSITE/EXTERNAL/NEWS/0,,contentMDK:21881807~pagePK:64257043~piPK:437376~theSitePK:4607,00.html>
- ・「学校に行っていない子どもが約7500万人」  
国際NGOワールド・ビジョン・ジャパン  
<http://www.worldvision.jp/learn/school/children/school.html>
- ・「日本のGDPは1999年から11年連続のマイナスである。さらに2010年では初の2%超えのマイナスを計上」  
Wikipedia「国内総生産」

## 優秀賞 [高校生の部]

日本の少子高齢化問題と途上国の貧困問題を同時に解決するという大きな提案を、自分の役割を明確にしながらか展開した点が高評価につながりました。

NRI学生小説コンテスト2011  
2025年の日本を担う  
わたしの夢  
入賞作品



# NEW-YEAR—2025— 日本が進化する年

神戸朝鮮高級学校2年

鄭 善治 ちゃん そんち

今、我々の前には、「2025年問題」が待ったなしの状態で突きつけられている。「2025年問題」とは、終戦直後のベビーブーム期（1947～1949年）に生まれた団塊の世代が2025年には75歳以上となり、社会保障費が急増すると心配される問題である。厚生労働省の推計によれば、2025年度の医療費は52兆円で、2006年度の約2倍、社会保障費も全体で約1.8倍の162兆円に達するとみられる<sup>1)</sup>。人類が今まで経験したことのない「スーパー高齢少子化社会」に、日本が世界の国々の先頭をきって突入することになる。少子化による労働力人口の減少は、実質GDP成長率の低下につながり、日本の

経済がマイナス成長に陥るのは時間の問題だといえる。また、財政においては、たとえ消費税率の引き上げがあったとしても財政赤字は一時的に減少するだけで、その後は歳出の伸びに伴い再び拡大し、2025年における一般会計財政赤字の対名目GDP比率は7.7%に達し、国債残高は900兆円を超えるものと思われる<sup>2)</sup>。税金の負担増、工場や企業の海外移転による失業率の上昇、人口の減少に伴う地方の過疎化。どう考えても、このままの状態では2025年に日本が深刻な事態をむかえてしまうことになるのは間違いないであろう。東日本大震災、福島原子力発電所の事故をきっかけにして、政府は

消費税アップを強行しようとしている。税と社会保障の一体改革に関する政府の集中検討会議（議長・菅直人首相）は2011年8月2日、財源対策を含む社会保障改革案を決定した。「震災復興」というスローガンの下での増税は、反論することができないような雰囲気さえ醸し出している。

頭の中では、仕方がないとわかっているつもりなのに、なぜか心が嫌がっている。収入の如何にかかわらずのしかかる税金。期待できない将来の年金。どんどん弱まる日本経済の成長率。悲観的な新聞やテレビ等のマスコミの論調は、我々、若者に「日本はこれから年寄りを中心とした小さな国づくりをするから、とにかくおまえたち若い連中は、高齢者を支えるために働け」と言っているかのようだ。はたしてこれでいいのだろうか、否、いいはずはない。これからの日本はもっと希望と活力に満ちている魅力的な国にならなければならない。2025年、この年を、日本が「老衰化」する年ではなく、日本が進化する新しい年「NEW-YEAR」とするために、私はいくつかの提案をしようと思う。

まず、なによりも10年単位で準備していかなければならない問題は「少子化問題」である。少子化が労働人口の減少、市場の縮小、税金の減収、社会保障費の負担増という問題を引き起こしている根本的な原因だといえる。もっと簡単に考えれば、やはり若者

や子供たちがたくさんいる社会は活力に満ちて生き生きとしているということである。しかし、いくら政府が少子化問題に本格的に取り組もうと、そう簡単に出生率が上がるものではないということは、この数年間の取り組みの結果として明らかである。

私は、ここで大きく発想を転換し、日本が国家的なプロジェクトとして、世界の貧しい家庭の子供たち、めぐまれない環境にある若者たちを一手に引き受けることを世界に宣言してはどうかと考えているのだ。そして、これは日本で生まれたコリアン三世としての私の夢でもある。私は日本にいながらにして朝鮮学校に今まで通ってきた。日本とコリアの2つの文化で育てられてきた。私のように、日本人ではないが日本のことをよく知り日本で働く若者がもっと増えればよいのではないかと考えた。

現在、地球的な規模では人口は増加し続けている。そのほとんどが発展途上国での人口増加である。多くの国民が一日に1ドル以下の生活費で暮らす最貧国や、貧富の差の激しい国々では数多くの子供たちが学校にも通えず、親からも見捨てられ、ストリートチルドレンとしてその日その日の命をкаろうじてつないでいる。劣悪な環境で病院にもかかれずに命を落とし、飢えや暴力の恐怖に日々さらされていることを、私たちは日本にいても、多くの報道を通じて知っている。私がインター

ネット(ウィキペディア)で調べただけでも、街頭で家を持たずに生活している子供の数は、世界中で1億、あるいは1億5000万人ぐらいいるといわれている。この子供たちを日本に住む我々が救おう、いや、彼らを救うことが日本を救うことになる、私は考えるのである。

まず、15歳以上、20歳未満の年代の若者たちの中で、希望者をつのり、日本に「修学」してもらおう。日本では、各都道府県に受け入れ数を割り当てる。そして、彼らは日本の優れた技術を中心とした学校教育を受けるのだ。昼間は学校や宿舎に併設された工場や施設で働きながら技術を習得する。もちろん給料ももらえる。生徒たちは、自分の給料の中から生活費を支払う。学校の費用は無料とするのがよいであろう。そして、教育の特色として、日本語を習得することを第一とし、1年次の間は、同じ出身国同士のクラスとするが、徐々にそのクラス構成をアトランダムなものとし、3年、4年次には日本語で全ての授業を受けられるようにするのである。そして、彼らには、日本で暮らし、働くことのできる「市民権」を与え、20歳を過ぎてからは、自国にもどるか日本で生活するかを自由に選択できるようにするのである。

次に、ストリートチルドレンの問題を抱える国に交渉し、都市部を中心とした特定の地域に15歳以下の子供たちを対象とした「日

本式の学校」を建設し、そこにストリートチルドレンたちを通わせるのである。もちろん、衣食住を提供するための施設も併設し、彼らが安心して学校で学べるようにするのだ。ここでのポイントは、この学校での授業に「日本語」や「日本の文化」を学べるものを必須として組み込むことにある。比較的、幼い頃から日本語を学べば、15歳を過ぎて、日本に来ることに抵抗はなくなるであろう。

日本に作られた世界中のストリートチルドレンのための学校と、各国に建設された学校で学んだ子供たちは、日本語が使える若者として成長するだろう。そして、彼等の多くが日本で市民権を得て働くことになるのだ。

今日まで数々の国難を日本は、教育を通して若者たちを立派な人間として育てあげることでも乗り切ってきた。今度は、その力をストリートチルドレンを救うための教育につかおう。私はそのためのコーディネーターとして、日本と外国との架け橋的な役割を果たしたいと願っている。2025年、日本は世界で最も若者たちで賑わう、進化した元気な国となっている。

1) 毎日新聞 2011年1月14日 東京版 朝刊

2) <http://www.murc.jp/report/research/monndai/1996/monndai199701.html>

## 特別審査委員賞 [高校生の部]

居住していたシンガポールと日本の社会を比較して、説得力ある論旨を展開。高齢者のパワーを社会に活かすという発想が、審査委員の心をつかみました。

NRI学生小論文コンテスト2011  
2025年の日本を担う  
わたしの夢  
入賞作品



# おじいさん、おばあさん集まれ!

帝塚山高等学校1年

千島 奈々 ちしま なな



私が小学校3年生の頃、某ファーストフード店で注文をしようとしていた時のことです。カウンターのメニューを見て、ふと顔を上げると、目の前には高校生ぐらいの女の子がいました。見渡してみると、他のレジの前にいる人も、後ろでポテトを揚げている人も、みんな学生の人たちでした。私はこのことにひどく驚きました。

私が幼少時代シンガポールに住んでいた時のことです。その頃もよく某ファーストフード店に足を運んでいました。同じようにカウンターで注文をしようと店員さんと呼ぶと、出てきたのはおばあさんでした。これとこれが欲しいと言うと「OK」と笑顔で対応してく

れました。テーブルの上の私が食べ終えた後のトレーを片付けてくれたのも、おじいさんでした。

家の近くのガソリンスタンドで車にガソリンを入れようとしたところ、「HELLO～」と言いながらおじいさんが車の窓をきれいに拭いてくれました。その人は歯がところどころかけた元気なおじいさんでした。

シンガポールの飲食店のどこを覗いても必ず一人はおじいさん、おばあさんの店員がいて、逆に学生らしき人はほとんど見かけなかったのです。

日本はどうでしょうか？ 見渡してみると、



飲食店の窓にはこんなチラシが張ってあります。「アルバイト募集! 高校生は時給900円〜」。チラシに「高校生」の文字が躍っている状況ですから、レジカウンターにおばあさんの姿は一人もありません。むしろ学生が圧倒的多数です。

日本に帰って来た時、私は驚きました。アルバイトで働いている方の年齢層がぐっと低くなったからです。私はその時何か違和感を感じました。そして、なぜおばあさんがいないのだろうと疑問に思いました。なぜ店は若い人ばかり雇うのだろうとも思いました。若くなくてもまだまだ働ける人はたくさんいます。若い人に比べて経験も豊富でしょう。

私のおばあちゃんは毎朝近くの友人とウォーキングをするほど元気があります。以前私がおばあちゃんに「また働いてみたい?」と聞くと、笑って、「そりゃあ、できるなら」と話していました。しかしその後、「でもなかなかできないよねえ」と言い、「雇ってくれる職場があればねえ。どんどん働くんだけどねえ」と言いました。なぜ、働くお年寄りの数が少ないのか? お店がお年寄りを雇わないこともあると思いますが、そもそもお年寄りがあまり面接を受けに行かないからです。そこでまた疑問がわきました。なぜ面接を受けに行かないのか、ということです。その理由は、ファーストフード店で働くのは若い子という先入観が社会一般にあるからだだと思います。お年寄りの

中には、自分が足を引っ張るかもしれないという不安を持っている人もいるかもしれません。しかし何より、その先入観が、お年寄りの社会復帰の妨げになっているのではないのでしょうか?

今日本で、「無給無年金」の期間がある人が増えているという問題があります。会社を退職してから年金をもらうまでに「空白」の期間があるということです。一般的に会社を退職するのは55歳です。ところが年金をもらえるのは、60歳を過ぎてから。この5年間の空白の時間、退職された方に収入はありません。収入がないと趣味に没頭できないどころか、生活すらまなりません。では働くか、となっても働きやすい環境が整っていません。アルバイト先の職場は若い人で溢れています。まだ学校に通っている人もいます。そんな中で改めて新しい環境になじむのは大変です。リタイヤしたけど、もう一度働きたい!と思う人と仕事をつなぐ窓口が必要です。

以前ある大学教授が、こんなことを言っていました。「学生は時間が大切。バイトをするよりも、その分の時間を勉強に使うべき。一時的にお金を稼ぐよりも、資格をとったりするほうが、生涯賃金は遥かに多い」。私はこの言葉に衝撃を受けました。私はアルバイトをしている高校生、大学生に理由もなく憧れていました。「アルバイト」という言葉の響



きをととてもかっこ良く感じていたのです。私の学校はアルバイトが禁止されているので、「じゃあ大学に入ったら……」と計画までしていました。しかし、この大学教授の発言からアルバイトに対する見方が変わりました。逆にアルバイトする学生の方々は随分時間を無駄にしているのではと思うようになりました。

確かに、自分でお金を稼ぐという経験は学校では体験できません。アルバイトを通して人との接し方や、お金の大切さも分かります。でも、勉強に専念できる時期は学生の時だけです。学ぶ時期に、しっかり学ぶ。社会に出たら嫌でも働かなくてはならないのだから、勉強できる時にしておくべきです。今は力をため込む時期です。

しかし現状は違います。某ファーストフード店、レストラン、スーパーマーケット、レンタルビデオ店……。どの店にもアルバイトの学生店員がいます。学費を稼ぐ、生活費を稼ぐ人ももちろんいるでしょうが、大半が小遣い稼ぎを目的にしているのではないのでしょうか。一時的な収入増と、生涯を通じた収入増、どちらが良いかは一目瞭然です。では、学生の皆さん、その「席」をお年寄りに譲ってみませんか。

そこで提案です。より多くのお年寄りが働けるように、55歳以上の方限定の派遣会社を作ってはどうか。会社は退職したけど、まだまだ働きたい方を集めて、要望を聞

き、その人に合った職場を提供するのです。

しかしこれでは、一般的な派遣会社と同じです。そこで、同じ職場になるべく多くの55歳以上の方を派遣し、気兼ねなく仕事できる環境を整えたいと思います。若い人がいるとどうしても仕事がそちらにまわったり、体力的な部分で引け目を感じてしまう方もいらっしゃると思います。私のおばあちゃんも同じようなことを言っていました。同じ年代の人がいると安心して、新しく物事に取り組むことに自信が付きません。私も今のクラブに入った頃は、同じ学年の子がおらず、心細い思いをしました。それでも、後から同学年の子が次々と入って来てくれたので、以前よりも楽しくなりました。楽しく仕事をするためにも環境づくりは大切です。

少子高齢化社会が叫ばれている中、今の日本を元気にするには、私たち若者の力だけでは足りません。日本にはパワーを持て余しているお年寄りがたくさんいます。私は将来、そんな方たちに仕事を紹介する会社を作りたいです。そして入るお店入るお店が、おばあさん、おじいさんの無料の笑顔で溢れるようにしたいです。

2025年、私は30歳。私の母は59歳。おばあちゃんは85歳になります。元気なおじいさん、おばあさんを集めて表舞台に復活してもらい、年齢にとらわれない社会にしたいです。

大阪府知事の橋下さんは「子どもが笑う

大阪」を目指しています。子どもは橋下さん  
にお任せするので、私は、「お年寄りが笑う  
日本」を目指します。